

長門峡が顕彰されたところ

―大正時代の名勝指定の向こうに―

浅川 均

はじめに

大正から昭和にかけて、鉄道網の拡充に象徴される交通の近代化は、まだ見ぬ世界を人々の身近にたぐり寄せた。遠くへの移動が可能になり、「大の旅好き」と評されることもあつた日本人の知的好奇心をくすぐり、旅行という生活文化のチャンネルを成立させた。

これは、あくまでも、ある一面を切り取っただけの時代評ではあるが、鉄道の延伸は、風景美を気軽に楽しむことを可能にした。一方で、鉄路の響きは、未来に向かう希望の軸として、各地で熱狂的に歓迎された。こうした気分の高揚にあわせて、旅行や観光を基軸とした地域振興のビジョンが盛んに描かれるようになった。

やがて、地域の未来予想も描き込まれた、多種多様な、いわゆる「案内書」が刊行されることになった。それは、街道沿いの神社仏閣・宿場・名物などを記した「道中記」や、名所を絵画的に表現した「名所図会」など、近世期に確立した旅行案内書の世界が引き継がれたものでもあった。明治以降の印刷技術の進歩ともあいまって、多様な刊行物として世に送り出されたのである。

本稿では、県内有数の観光地長門峡に関連した館蔵資料の概要を紹介するとともに（末尾に一覧として掲載）、当時の景勝地顕彰の背景について考えてみたい。

長門峡（ちょうもんきょう）の命名は、大正九年（一九二〇）八月、溪谷の探勝を終えた山根武亮と高島北海らの合議によるとされるが、本稿では、それ以前に呼んでも、阿武川上流溪谷の呼称として、便宜的に「長門峡」の呼称を用いた場合もある。

一 意識されはじめた溪谷美 — 長門峡前史 —

明治以前の長門峡は、城下町萩を流れる阿武川上流の仙境であり、絵画に描かれ詩歌に詠み込まれることのある景勝地として漠然と認識されていたようである。

明治三十二年（一八九九）、陸軍参謀本部陸地測量部による調査が実施され、徐々に地理的認識が定まってくることになるのだが、明治四十二年刊行の「阿武郡全図」

〔No. 1〕以下別表の資料番号に対応）には、長門峡内の瀑布名称等の記載は見られない。

この溪谷が、世間に認知され、人々の耳目を集めるきっかけになった二つの出来事を紹介しておきたい。

（一）電源開発計画

明治四十一年、河北勘七（山口出身の実業家、小野田セメント製造株式会社二代目社長、のちに山口町長・衆議院議員）らによる水力発電計画立案にもない、阿武川上流峡谷での実地検分が行われた。現地の状況が写真に撮影され、その佳景が世に広まる材料になった。

調査に同行した写真師は原田耕雲（原田耕作）。山口

町湯田で営んでいた写真館の広告には、「長門峡最初の撮影」と謳われている。県立高等女学校の卒業記念写真帖の制作者でもあり、のちに、高島北海による県内の景勝地（長門峡、青海島、美祢郡の鍾乳洞など）調査に随行することになる写真師である。

北海に随行した写真師としては、山口町で写真館を開いていた藤井薫の名前も確認できる。藤井は、大正十年（一九二一）十一月の防長新聞に「新しい二鍾乳洞」と題する報文を寄せ、当時新たに発見された美祢郡の大正洞と中尾洞を紹介している（ちなみに、大正九年七月、東京帝国大学理科大学教授・地質鉱物学者神保小虎による景清穴の調査概要を防長新聞に寄稿した「かをる坊」は藤井薫と思われる）。『名勝長門峡案内 附佐々連の鍾乳洞』〔No. 17〕の編纂や絵葉書の制作にあたっている。

明治末期は、水力による電源開発が、全国的に推進された時期にあたる。県内でも、阿武郡内の阿武川や大井川での水力発電計画が立案された。阿武川に関しては、本流に注ぎ込む生雲川や蔵目喜川の豊富な流水が注目されることになったが、急峻峻な谷あいでの水路設置や発電所建設は容易なことではなく、県知事に提出された

複数の水利使用願からも、数度にわたる設計プランの変更（取水口や発電所設置場所の変更）を確認できる。

この発電計画には、河北をはじめ、山田桃作・庄晋太郎・賀田金三郎・大岡育造など、県ゆかりの起業家や政治家が発起人として名前を連ねていた。電源開発事業は発電のみならず、安定した電力需要確保のために県域を越えた広範囲への送電や供給エリアの高度な工業化（当時は化学工業）を必須要件とした総合開発事業であったがゆえに、大がかりな体制の編成が不可欠であった。阿武川水電事業も、最終的には日窒コンツェルンの総帥野口遵しんがうの指揮下へと引き継がれた。阿武川水力発電所の完成は大正十二年四月のこととされる。

「水利使用一件」【No. 2】に綴じ込まれたいくつかの計画図面には、長門峡内の瀑布や溪谷の名称が書き加えられており、電源開発を契機として、阿武川上流溪谷への地理的認識が深められていったことを物語る。

水力発電所の置かれた阿武郡川上村阿良谷は阿武川ダム（昭和五十年完工）のダム湖に水没。蔵目喜川が流れ込む金郷出合の江毛九郎堰に、当時の取水口の構造物がその姿をとどめている。

（二）外国人のみた溪谷美

大正元年（一九一二年）八月、吉敷郡小郡町の県立農業学校を会場に、県教育会主催の夏期講習会が開かれた。期間中の十六日に開催された第八回山口県教育会総会では、山口高等商業学校の *George Edward Luckmann Gaunthert* ガントレットによる「秋吉瀧洞探検談」と題する学術講演が行われた。翌日に計画されていた秋吉瀧洞（現秋芳洞）の学術探勝に備えて実施されたものである。

秋吉瀧洞・景清穴・台山（秋吉台）の概要を紹介、地質学的な特色について述べた後で、景勝地探勝の魅力を熱弁し、阿武川上流の溪谷美について「天下無比」「佳絶な景色」「耶馬溪以上」と激賞。郷土愛の醸成に好適な自然美であることを強調している。さらには、将来の鉄道延伸を見越して、溪谷の観光地化が可能であることを指摘し、さらに、公的な景勝地保護の必要性についても言及している。

この講演は、防長新聞に連載された（八月二十日から二十九日）ほか、防長教育会機関誌『防長教育』第四五号（大正元年九月発行）でも紹介された。

英国王立地学協会員でもあったガントレットは、明治

四十年（一九〇七）九月に金沢第四高等学校から山口に英語教師として着任（大正五年、東京高等商業学校に転任）、休日には、自らの地理的興味や旅行趣味により、頻繁にハイキングに出かけ、山口周辺の山容や谷間を彩る滝の織りなす風景を堪能していたようである。山口着任翌年の夏以降、避暑もかねて阿武川上流溪谷の探勝を繰り返していたとされる。

「英国では其国の地理をよく知るものは外国人であるともうします」、講演の冒頭でガントレットが述べているように、当時のヨーロッパの識者には、土地の人よりは他郷人、異なる目線や価値観が、その土地固有の文化と美の発見をもたらすとの認識があったようである。

例えば、日本アルプスの山岳美を日本国内に広めたのは、イギリス人鉱山技師 *William Goulard*、ゴールランド（日本考古学の父」としても高名）や、イギリス人宣教師 *Walter Weston* ウェストン（「日本アルプスの父」と呼ばれる）であった。

当時は、九州の耶馬溪が国内の溪谷美の代名詞であった。各地の溪谷は、多くの場合「〇〇の耶馬溪」と称されていた。長門峡の場合も「長門耶馬溪」と呼ばれるこ

ともあった。ガントレットやその周辺の外国人教師は、峡谷を意味する英語 *canyon* を用いて、「阿武川「ゴージ」「御堂原ゴージ」と呼んでいたようである。

ガントレットは、この講演に阿武川上流溪谷の写真を持参していたとされる。講演録連載期間中の八月二十六日の防長新聞には「阿武郡生雲村の瀧／発電所建設予定／原版山口湯田エッチ写真館寄贈」とする写真が掲載されている。

二 永見貞一の探勝

大正六年（一九一七）七月、陰陽連絡鉄道（山口線）山口・篠目間の開通にあわせて、防長新聞紙上に近傍の景勝地として阿武川上流の峡谷を紹介した「長門耶馬溪の探勝」と題する紀行文が連載された（七月一日から八日まで）。

これは、終着駅（篠目駅）の所在する篠生村や阿武郡からの要請を受けた防長新聞社が、記者を長門峡現地に特派したもので、集客を目的として地元が選択したメデア戦略と受け取ることができる。

山口線の敷設には、陰陽連絡に加えて、ともに兵営地であった島根県浜田と山口を結びつけるという軍事上の重要な要請があった。

仁保・篠目間は、急勾配で長大トンネルが連続することから、開通までに時間を要した区間であった。以後の鉄路の確実な維持のためにも、安定的な旅客収入が必要とされ、鉄道省の側でも、集客の目玉として、路線近傍の景勝地を観光地として売り出すことが強く意識されていた。阿武郡や篠生村が、地域の近代化の起爆剤として鉄道開通をまたとない好機ととらえていたことも事実であろう。こうした国家の意向や地域の動向を支える世論を「筆の力」で展開させることは、「社会の公器」を標榜する新聞社にとっても歓迎すべきことであつたものと思われる。

連載の筆者である永見華北（貞一）は、大正から昭和戦前期の防長新聞で、社会部記者として健筆を揮つたジャーナリストのひとりである。一時期、防長新聞を辞して防長実業新聞の発行にも携わっていたが、復社後は総務局長として社務の統括にもあたり、昭和十年代の防長新聞を牽引した人物である。そして取締役・支配人とし

て「一県一紙」の新聞統制政策による防長新聞社清算の時を迎え（昭和十七年（一九四二））、『防長新聞六十年史』の編纂にあつた。

交通網が未整備であつた当時、「まだ見ぬ土地」を知りたいという世間の願望は、新聞記者の現地踏査に基づいたルポルタージュによつて満たされることもあつた。永見をはじめとする当時の新聞記者や文筆家による紀行文には、漢籍や地理学の知識がちりばめられており、イメージの中で読者を現地へと誘う。

永見は、長門耶馬溪のほかにも、大正五年には玖珂郡の北部山地と錦川流域、大正六年には萩六島と見島の現地踏査を実施。地勢の紹介に加えて、人情・風俗・伝説などを巧みに織り交ぜて、前者を「周防アルプス」、後者を「日本海の孤島」と題して新聞紙上に報告している。同じ頃、防長新聞記者桜井風浪（悌三）による周防大島と平郡島・祝島などその周辺島嶼部の探訪も実施され、その景趣は「周防の多島海」と題して紹介されている。

新聞によるこうした情報伝達は「筆征」と呼ばれることもあつた。「まつたく知られていない」ということではなく「あまり詳しくは知られていない」という世間の

認識の空隙を埋める役割を活字が担っていたということである。こうした紀行文には、急峻・峻岨・隔絶・探検などの言葉が踊り、辿り着くことや探し当てること、場合によっては「鍛錬」のニュアンスも込められている。

辛苦の克服の向こう側にこそ、近代社会にとつて有益な桃源郷や理想郷が存在するのであり、その場所に秘められた物心両面の富源が社会のさらなる進歩を可能にするという、当時の「新しい世界」の受け入れ方が濃厚に凝縮されているように思われる。

永見による長門耶馬溪探勝の紀行文では、水流や岩肌や山容の繰り広げる奇景絶勝が筆の力により美しく修辞されており、冒険心を心地よくくすぐる。

こうした紀行文に彩りを添えることになったのが各地で語り継がれていた伝承の数々であった（長門峡の案内書に取り上げられたものとしては【No.6】参照）。

奇境怪話とも称されたこの種のエピソードは、「たたら」「古戦場」「敗れしもの」「落人」「かくれ里」「東大寺再建」「義民」「雪舟」など、いくつかの共通するテーマがモチーフになっている。連綿と息づく各地の営みの歴史を豊かに演出するエッセンスなのである。

三 軍人の影響力

（一）山根武亮と高島北海による長門峡探勝

大正九年（一九二〇）八月八日から三日間、陸軍中将男爵にして貴族院議員であった山根武亮と、画壇の巨匠と呼ばれ林学地質学にも通じていた高島北海（得三）による阿武川上流溪谷の探勝が敢行された。二人はともに萩出身、藩校明倫館以来の知己であった。

溪谷を目の当たりにした北海は、当時の防長新聞ほかによれば、「凝灰岩の耶馬溪に比べて火成岩の生雲溪（＝長門峡）は雄大で武人的」「峡谷の美景としては日本一」と絶賛、雄大豪壮な風景を「危岬・峭壁・激流・飛瀑・碧潭の千変万化」と表現して、「只恍惚」「人を麻痺せしむ」の言葉を残している。

この探勝が、景勝地長門峡のステイタスを揺るぎのないものにした。保勝会の結成、探勝路の整備（北海の絵筆にすがる資金捻出）など、集客や知名度向上のための手立てが次々と講じられていった。そして、大正十二年三月、長門峡は、国の名勝に指定された。

(二) 山根武亮と国司精造

長門峡開発に關しては、高島北海の名前に圧倒されて陰に隠れがちであるが、山根武亮の存在も見過ごすことはできない。

嘉永六年（一八五三）生まれの山根は、日清戦争時は寺内正毅とともに広島大本営兵站督部に配属され、その後、佐世保と下関の要塞司令官、近衛師団長を歴任、日露戦争での軍功により金鷄勲章を受章した。

長州出身の山根は、陸軍にあつて鉄道敷設に大きな影響力をもつ人物としても知られていた。長門峡の顕彰を目論んだ阿武郡長岡村勇二は、山根に対して、高島北海への橋渡し以上の、政治的な影響力に期待を寄せていたと思われる。長門峡の価値づけを政策展開にどのような昇華させていくのか、行政官にとつて、山根の存在は精神的な支柱であつたのかもしれない。

岡村勇二は、大正八年（一九一九）に、萩において山根と面会、長門峡の価値を知る人物として明倫小学校訓導藤本瀧江を紹介している（藤本は、古典や地理に通じ、長門峡及びその近傍の伝承を大正九年十月の防長新聞紙上で連載している【No.6】）。

阿武川上流の長門峡入口にあたる御堂原飯の山には、山根揮毫による「長」「門」「峡」の文字を刻んだ三枚の板石が探勝者を迎え入れる【No.10】。

長門峡の観光開発という地域振興策は、周辺地域にも影響を与えた。山口町でも長門峡探勝者の増加を期待して、大正十年五月、長門峡共楽会が発足した。会長の任にあつたのが陸軍少将国司精造である。共楽会は立永勝三郎経営の三星社（宮野村折本）に事務所を置き、探勝道の補修、休憩設備の充実、阿武川右岸への渡船の配備、遊漁設備の整備などにあつたのであるが、最も力が注がれたのが、湯の瀬での旅館「萬碧楼」の経営であつた。湯の瀬は長門峡上流部の御堂原と下流部の高瀬（萩へ向けての阿武川下りの起点）のほぼ中間地点に位置する古くからの湯治場であり、本格的な宿泊施設の開業が渴望されていた（大正十年八月十日拡充開業）。

国司精造は、慶応二年（一八六六）長州藩士兼重慎一の実子として吉敷郡矢原朝田村に誕生、画家兼重暗香の異母兄にあたる。陸軍士官学校では田中義一と同期にあたり、日露戦争での軍功により金鷄勲章を受章。大正期に予備役となつて山口に帰郷した後は、武学生養成所所

長として長州閥の人材育成にあたっていた。一方で、和歌・俳句・囲碁・謡曲など文雅の道に通じた教養人・文人としても高名であった。昭和十年代には、防長新聞社の相談役としても、その名をとどめている。

山根武亮も国司精造も、郷土が輩出した軍人であり政治的な影響力を有していた。軍人として戦役で軍功をあげるだけではなく、国家や軍の中核で手腕を発揮するためには、様々な修練研鑽に裏付けられた幅広い素養と見識に加えて、政治を動かすことのできる人的ネットワークが必要とされた。

軍功については、冷静かつ公平な分析や理解が必要であることは言うまでもないが、中央政府で軍人として確固たる地位を築いた人物のネームバリューは、地域振興のシナリオ実現にあたっては欠くことのできないものであった。「一流名士」「郷土最高位の社会人」として地域社会の推進力たるべく、その人脈や影響力は大いに歓迎されたということである。

四 長門峽を受けとめる

（一）長門峽の学術的価値
 峽谷美でその名を知られる長門峽であるが、学術的にも高い評価を与えられている。

高島北海による長門峽に関する学術的な評価は「長門峽ノ五大特色并ニ丁字川」として公表された【No. 3】。長門峽の地質学的な特色として、「①空気の変化 ②石脈の横断 ③水中の巨岩及石色石理の美 ④瀑布及淵潭 ⑤天然喬木林」を掲げている。これは、長門峽の学術的な価値を要約したマスターピースとして後に頻繁に引用されることになる。

長門峽の顕彰とほぼ時を同じくして、美祢郡の鍾乳洞（秋吉瀧穴・大正洞・景清穴・中尾洞）への関心も高まっていた。その関係で、地質学者による来県長門峽探勝がこの時期相次いでいた。

写真師藤井薫が同行した神保小虎の他にも、脇水鉄五郎（東京帝国大学農科大学教授理学博士）、小川琢治（京都帝国大学理学部地質鉱物学科初代主任教授、貝塚茂樹と湯川秀樹の実父）、井上禱之助（農商務省地質調査室長、のち旅順工科大学総長、玖珂郡阿月村出身）ら、地質学の權威の相次ぐ来訪は、長門峽の学術的な価値を際立

たせ、知名度の向上をもたらした。

神保や井上は、史蹟名勝天然紀念物保存協会（明治四十四年（一九一））結成、会長徳川頼倫）の役員（常務委員・評議員）にも名を連ねており、長門峽の顕彰・保護についての示唆を得ることができたであろうことは想像に難くない。なお、彼らの現地探勝には、多くの場合、高島北海が同行している。

大正十二年（一九二三）八月には、山口師範学校で東京地学協会（会長は神保小虎）主催の学術講演会が開かれ、その後、長門峽の学術視察が実施された。このとき、「長門峽に就いて」と題する基調講演により、長門峽の開発顕彰の歴史や地質学上の特色を紹介したのが、防長新聞社の副社長であり主筆であった原田豊次郎（紀堂）である（この講演は冊子にまとめられている【No.15】）。下関出身の原田豊次郎は東京帝国大学政治学科を経て、中央新聞（社主は豊浦郡小串出身の大岡育造）入社、朝鮮京城日報で主筆として論説を担当、東京朝日新聞在籍後、大正六年九月の防長新聞大拡張のタイミングで社運を託された気鋭の論客であった。

この講演でも触れられているが、大正十二年一月、川

上村高瀬北方の佐々連川上流で新たな鍾乳洞が発見されていた（佐々連洞、観音窟など複数）。五月一日には開洞式が举行され、観光開発が大いに期待された。川上村高瀬小学校校長張忠一が発見の功労者とされている。その後、高島北海による探勝、県史蹟名勝天然紀念物調査員岩根又重、地質学者神保子虎による現地詳細調査も済ませて、文化財としての国指定が有力視されていたのだが、大正十二年の関東大震災による調査資料の散逸、翌年の神保子虎の急逝のため、世間に知れ渡る一歩手前でその途を閉ざされてしまった（【No.17】）。

（二）長門峽を情緒的にとらえる

景勝地は、絵画に描かれ、詩歌に詠まれ、道中記や紀行文に認められ、それをきっかけとしてその存在が広く知れ渡ることがしばしばであった。

科学的な実証が重要視されるようになっていたとはいえ、景勝地の顕彰や保護にあたっては文学的由緒や歌枕的な名所に象徴されるような情緒的な視点を完全にぬぐい去ることはできなかったものと思われる。したがって、実証的・学問的なとらえ方と情緒的なとらえ方の絶妙なバランスの上に景勝地の顕彰は成り立っていた。

長門峡においても、探勝道への桜や楓の植樹が計画された（ここでも高島北海の画会収入をその経費として充当）。大正十一年（一九二二）、長門峡桜樹植栽会が組織され、翌年三月、植木の産地として知られていた埼玉県北足立郡安行あしきょうから桜の苗木が購入された。景勝地の評価について、自然科学からの学究的な価値観だけではなく、花鳥風月に象徴される日本的な情緒を加えることも重視されていたことを物語る。

当時、内務省において、史蹟名勝天然紀念物調査会委員として、文化財の指定保護のシナリオ作成に大きな影響力を持っていたのが国府犀東（種徳）であった。東京帝国大学法科大学政治学科出身の国府は、漢学者であり、新聞記者、雑誌太陽主筆を務めた後、内務省で地方改良運動や文化財保護行政に関与、詔勅の草稿作成にかかわることもあった人物である。大正十一年には長門峡にも来訪している【No.6】。国府の存在は、世論の形成にあたって「筆の力」が大きかったことを物語る（ちなみに、高島北海の墓碑銘は国府の書になる）。

県内で、国府と同様の影響を与えていたと思われるのが、萩出身の横山健堂（達三）であった。東京帝国大学

文科大学卒業後、読売新聞や大阪毎日新聞に籍を置いたジャーナリストであるが、黒頭巾のペンネームでの人物評論や歴史評論に関する数多くの著作で知られる。

『長門峡游记』【No.18】や『長門峡と耶馬溪』【No.25】で長門峡の魅力を情緒豊かに綴っている。後者の「はしがき」は、防長新聞の原田紀堂による。横山健堂と原田紀堂はともに山口県人であり、同時代を生きるジャーナリストとして深い親交があったものと思われる（大正期の防長新聞紙面には、「紀堂兄」の書き出しで始まる横山健堂の旅先からのエッセイが数多く目にとまる）。

史蹟名勝天然紀念物の価値を世間に浸透させるためには、科学的な追求に加えて、歴史性などを加味した地域の特性をふまえた評価や理解も必要であった。その手段として、文学的で情緒的な味付けも必要とされていたのであり、博覧強記を自負するジャーナリストの「筆の力」は、その大きな推進力になったものと思われる。

昭和四十五年（一九七〇）発行の『阿東町誌』に、高島北海に加えて、「長門峡開発のもうひとりの恩人」として紹介されているのが、花の本聰秋（美濃大垣藩出身の俳人上田肇）である。

長門峡への来訪を重ね、その景勝を絶賛、長門峡北口の田中旅館を洗心館と名付けた（前庭に聴秋の句碑「来て見れば日本無比の長門峡」がある、旅館は廃業）ほか、御堂原の長門峡探勝道入口の橋を洗心橋と命名。長門峡に対する高島北海の義拳（絵画販売収入の寄附）に感銘を受けて、自らも俳句の揮毫頒布により得た収益を長門峡保勝会に寄附。この資金を元手に湯の瀬から阿武川右岸に渡る橋が架けられ、聴秋橋と名付けられた（大正十一年春架橋か？その後流失）。探勝道を彩る桜樹苗木も寄贈している。

聴秋は、長門峡の顕彰や開発に関する動向を、山口町在住の門人三村順輔（圭州）から知らされていたようである。三村は山口線敷設工事にもかかわった鉄道技師であり、三村家に残された鉄道敷設関連の文書や写真は当館に所蔵されている。

大正から昭和にかけて刊行された長門峡の案内書や当時の防長新聞には、ほかに、作間鴻東（久吉、県立教育博物館初代館長）、高島九峰（張輔、高島北海の兄）、熊野九郎（山口在住の文化人【No. 7】）、古屋醉紅（篠生村の俳人）らによる長門峡を主題にした詩歌や紀行文が

頻繁に紹介されている。

長門峡の顕彰が繰り広げられていた頃、山口町にあつては、サビエルの事績顕彰、「七卿落六〇年」を記念した記念碑設立の準備が進められていた。歴史の顕彰により「山口らしさ」を際立たせる作業であった。こうした歴史性の演出に名前を連ねていたのが、作間久吉、熊野九郎、上司淵藏（元師範学校長）、国司精造、河北勘七、中原謙輔（中原中也兄、医師）、原田豊次郎らである。長門峡顕彰の関係者との重複が見られ、文化事業や顕彰事業がどのように意識され、どのように成り立っていたのかを読み取ることができて興味深い。

五 長門峡の顕彰がもたらしたもの

（一）阿武郡内陸部のアイデンティティ

大正六年（一九一七）七月、山口線の篠目延伸により、阿武川上流の渓谷美が注目されたことはすでに紹介済みであるが、今日のように経済浮揚を地域発展の第一義と捉えるとなれば、渓谷の知名度を高め集客増を目論むこと、さしずめ、観光収入の増加を見込んだ地域振興策が

張り巡らされることになったという理解になるのである。『溪谷美の名所化』『観光地の創出』という地域振興のベクトルの出現である。

しかし、長門峽開発に関する阿武郡長岡村勇二や篠生村長口羽順蔵の述懐からは、別の世界観や価値観を垣間見ることができている。顕彰作業を通じて、阿武郡内陸部にとっての長門峽の存在意義を地元で共有しようという指向を読み取ることができるのである。それは、「地域の自己主張」ともいうべき意思表示である。

長門峽を地域資産として意識する作業は、「近世の城下町である萩」以外の阿武郡域、近代の阿武郡内陸部にとつての「地域のアイデンティティ」を確立する作業であったと思われる。それは、長門峽を、阿武郡にとつての富源（＝地域資産）として位置づけることであった。

こうした認識が、阿武郡長岡村勇二らによる山根武亮や高島北海の招聘を実現し、さらには、両名の後押しによるすみやかな保勝会発足、その後の長門峽開発に結びついたものと思われる。

（二）地方改良と長門峽顕彰

日露戦後、国力充実を目標に高唱されたのが地方改良

のスローガンである。その要目の一部として国民教化や地域振興も掲げられていたことにより、勝地の顕彰や保存について関心が深まっていく。植物学者三好学や鉱物学者神保小虎など、自然科学研究の立場からの強いはたらきかけの影響もあって、勝地について、「日本固有の風景」という新たな価値判断のチャンネルが加えられていく。郷土の特徴を自然の面から照射することにより、地域の独自性に基づいた地域振興策をうちたてるという道筋が用意されることになった。

山口県にあつても、明治四十四年（一九一一）六月、翌年四月の郡市長集会での知事訓示事項として「史蹟勝地記念物等ノ保存ニ関スル件」（後者では「史蹟名勝天然記念物等ノ調査保存ニ関スル件」）が当時の政策上の新たなトレンドとして伝達されている。

景勝地の顕彰保護に関しては、「比類少き性質のものを貴ぶ」とする学術的な価値が強調されるようになった一方で、「郷土や国土の美を保護することで愛郷心や愛国心を育成する」「風教を維持して品性を陶冶する」といったような精神面に訴える論調を帯びてくる。

国力充実のためには愛国心の薫育が必要であるとの理

由から、愛郷心を育むことこそが愛国心の醸成につながることに、その媒介として「歴史・風景の美、天然記念物」に価値を付与することが欠かせないとする考え方が大きなうねりとなってきた。その底流にあったのは、揺るぎない帝国主義の確立には、愛国心や郷土愛をもった国民の創出が必要であるとする国民教化の理念である。

このような理念の敷衍に大きな役割を果たしたのが、明治四十四年に設立された史蹟名勝天然記念物保存協会による旺盛な啓蒙活動であった。会報『史蹟名勝天然記念物』の紙上で繰り返し広げられた「歴史・風景の美、天然記念物」の顕彰保護に関する論調は、地方改良運動の推進に積極的に取り込まれることになった。

常務委員として、保存協会の理念形成にかかわった医学博士三宅秀（貴族院議員）は、地方改良運動に多大な影響を与えたとされる中央報徳会の機関誌『斯民』第八編第四号（大正二年（一九一三））の紙上における「史蹟名勝天然記念物を保護せよ」と題する報告の中で、「生まれ故郷他国に優り勝れて居る点を十分に知らしむる事は、自国を敬ひ、愛国心を養成する所以」として、郷土地理の研究を推奨する言説を展開している。

長門峡が顕彰されたころ（浅川）

日露戦後の日本社会は、多大な戦費出費がもたらした財政的な行き詰まりの影響のため閉塞感に満ちたものとなっていた。そのしわ寄せは地方社会に色濃く反映され、経済的な事情による離村人口の増大、それにもなう地方社会の崩壊の兆候が顕著になっていった。したがって、地方改良の旗印の下で、直接的に財政再建（財政支出の抑制と経済基盤の整備）による国力強化が強調されることになったのであるが、その一方で編み出されたのが、郷土愛にすがって離村による農村崩壊を防ぎ、国力の回復充実をもたらすという観念的な手段であった。このような理念のもとで急浮上・肥大化してきたのが、由緒に裏付けられた史蹟保存であり人物顕彰であった。勝地や景観の保護についても、学術的な側面が意識されつつも、「郷土愛」→「愛国心」という国民教化策の側面があったことは否定できない。

勝地や記念物の顕彰保護を支える便利な概念として、当時盛んに援用されていたのが、ドイツ発祥とされる「郷土保護」の論理であった。勝景・天然記念物・古建築・風俗・言語などについて、学術資料としてだけでなく、国民に精神的影響を与える郷土の空間構成要素としての

価値を見出して保護を加えることが強調された。

誰もが目の当たりにすることができる自然美のもたらすナチュラルな感動、識者による学術的な高評価、国家による地方改良の理念や意図、どれがどれほどのウエイトを占めていたのかを推し量ることは難しいが、長門峡の顕彰について振り返るとき、底流に渦巻いていた「時代の影」を意識しながら考察を加えてみる必要がある。

（三）勝地開発と朝鮮金剛山

高島北海が長門峡の開発の恩人として賞賛されていることは周知の事実である。大正十三年（一九二四）には長門峡探勝路への寄附により紺綬褒章を受章している。

北海は農商務省山林局などで要職を歴任、フランスで地質学と森林学を習得、官を辞した後には、画家として、自然科学の知識と南画の伝統的な味わいの融和を視覚的に表現した人物である。

北海が重視したのが旅行体験であつたとされる。「天然物の写生をなして造物者と親密の交際をするのが第一」とする北海の言説がそれである。その前提として「①普く物体を写生すること ②地質学動物学植物学等の書を読むで天然物の状態性質を察知すること ③物理学の

大意を知ること ④詩歌の書を読むこと ⑤時々旅行すること」を要件として掲げ、「写生する中にも其物の美を発見することに心がけねばならぬ、其物体の性質を研究する中には其美が分る」と述べている。自然美に向き合う北海の姿勢が凝縮されている（『美術新報』第二巻第一四号（明治三十六年）所収の「東洋画に就て」）。現地を訪れ、岩石や流水、山容や植生によつて彩られた深山幽谷の美を堪能する、そのうえで、科学的な観察がもたらした目線と、南画に漂う伝統的な目線を織り交ぜて風景画として表現したのである。こうした姿勢が、北海を阿武川上流の渓谷美の探勝へと誘い、長門峡の命名へと繋がった。北海は、「長門峡の特色を述べた談話の中でも「事実が物を言います」との言葉を遺しており、現地踏査の重要性を強調している。

長門峡探勝後の北海は、青海島・石柱溪・須佐湾など、郷土の名勝の開発（国の名勝指定）に情熱を傾注する。

若き日に滞欧経験を持つ北海であるが、明治三十年代以降、北米ロッキー山脈、中国揚子江流域などにも足を運んでいる。そして、長門峡を訪れる直前の大正六年、朝鮮半島の金剛山をも踏破している。このときの見聞は

「朝鮮金剛山真景図」（大正六年）、「朝鮮金剛山万物相関図」（大正八年）、「朝鮮金剛山真景」（大正九年）として描かれている。

金剛山（単一の山の呼称ではなく、複数の山嶺の総称）は朝鮮半島の代表的な名山である。名山という場合には、奇岩や流水の織りなす景勝美がそこにあるだけでなく、霊峰として何かしらの信仰が寄せられ神秘性を持ち合わせている。

植民地時代、朝鮮総督府鉄道局が「東洋一の絶勝」として観光開発に着手。交通網整備（京城からのアクセスを重視した道路改良や鉄道敷設）、宿泊施設整備に乗り出した。太平洋戦争終結まで継続されていたという開発の全貌を資料や記録に基づいて正確に跡づけることは難しいうえ、植民地政府による近代化の施策のひとつであったため、その理解や評価には慎重を期す必要があるが、最終的には、ハイキングコース・スキー場・ゴルフ場・海水浴場・宿泊施設をともなつた一大リゾート地が形成されたとされる。

金剛山の佳景を広めるために、朝鮮総督府の主導により、日本国内の文人や画家が積極的に招き入れられた。

彼らの賞揚は、詩歌・小説・絵画などの作品に反映され、景勝地金剛山の存在が認知されるようになっていった。著名人の賞揚によりステイタスをあげていくという手法も含め、いわば国内の景勝地開発のプロトタイプとして朝鮮金剛山開発は認識されていたのかもしれない。

おわりに

北海の基本姿勢として紹介した「科学知識と南面の味わいの融和」とは、「近代的なものと伝統的なものの融和」と置き換えることができるように思われる。

ここで考えてみたいのが、進歩や発展に裏づけられた「近代」というステータジと、既知の概念やそれまで手の届いていなかった未知のものとの折り合いである。

長門峡に対するガントレットの絶賛、永見貞一らによる「筆征」、長門峡の賞揚、植民地政府による金剛山の開発、いずれの場合においても、「それぞれのイメージする近代」と、「それぞれにとつての未知なるもの」がどのように接触したのかということが問題であった。

芸術にせよ地域振興にせよ、近代という時代と伝統的

なものや未知なるものがどのようにかかわろうとしたのか、それは凌駕であったのか、共生であったのか。

長門峡で展開された観光開発や地域振興をあとづける諸資料は、「綺麗」「あでやか」「愉快」「わかりやすい」という印象を与える。そこには、地域でいだかれた際限のない期待感が凝縮されている。しかし、一方で取り巻く時代の雰囲気を感じをめぐらせると、近代化によりもたらされるであろう輝かしい未来ばかりではなく、そこに横たわっていた苦悩についても、改めて考えるきっかけを与えてくれる。

長門峡支流域にあたる、生雲溪・金郷溪・漣溪、大正末期以降の景勝地開発の熱狂から忘れ去られてしまった溪谷美がそこには今なお存在している。近年、萩ジオパーク構想の推進により、これらの溪谷は、再び地質学的な注目を集めるようになってきた。インターネット上でも、「幻の観光ルート」「山口県最後の秘境」として取り上げられるようになっており、人々の冒険心をくすぐり続けている。

手が届きそうで届かない、「近代化」を経たのちも、自然と人間のほど良い距離感がそこにはある。

（参考文献）

- ・荒山正彦『近代日本の旅行案内書図録』（創元社、二〇一八年）
- ・赤井正二『旅行のモダニズム 大正昭和前期の社会文化変動』（ナカニシヤ出版、二〇一六年）
- ・高木博志「史蹟・名勝の成立」、住友陽文「史蹟顕彰運動に関する一考察」（ともに『日本史研究』第三五一号〈特集 近代の文化財と歴史認識〉、一九九一年）収録
- ・水谷知生「内務省における自然の風景に関する制度化の経緯」（『人文地理』第六七巻第五号、二〇一五年）
- ・齋藤智志『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』（一般財団法人法政大学出版局、二〇一五年）
- ・森本和男『文化財の社会史 近現代史と伝統文化の変遷』（彩流社、二〇一〇年）
- ・『造化の秘密を探る―没後80年高島北海展』（下関市立美術館、二〇一一年）
- ・金折裕司・廣瀬健太「長門峡」と高島北海」（『応用地質』第五〇巻第五号、二〇〇九年）
- ・金折裕司「高島北海と国指定名勝および天然記念物」（『応用地質』第五四巻第二号、二〇一三年）
- ・蔡家丘「1910年代―30年代における日本人画家の東アジア旅行と創作についての研究―地域と文化に絡む東アジアの図像」（博士論文（平成25年度筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻））
- ・『防長新聞六十年史』（防長新聞社清算事務所、一九四三年）
- ・『E・ガントレット氏と山口県』（山口県教育委員会、一九五六年）
- ・上田千秋『俳諧宗匠 花の本聴秋』（株式会社社文藝春秋出版部、二〇二〇年）
- ・『国司翁白寿記念』（白寿祝世話人一同、一九六二年）

表 「長門峡」関連資料一覧

No.	所蔵 請求番号	史料名	作成年	備考 (発行年、内容ほか)
1	文 滝口明城244	阿武郡全区図	明治42年4月	●著作兼発行：藤川東輔（萩町字西田町） ●発行所：合英書院（萩町字西田町） ●印刷：水口印刷電館（大坂市東区南久宝寺町2丁目） （▼浜谷各などの記載なし）
2	文 鞆前鞆後土木部90	水利使用一件 （阿武川水力電気株式会社）	明治43年以降	●内務部土木課文書簿冊（▼水力発電計画に係る「水利使用願」等） ▼添付図面（明治32年陸地測量部測量地形図/取水口平面図ほか）
3	文 一般郷土史料B263 文 滝口明城256 図 Y273/F 0	長門峡/五大特色井二丁字川	（発行年不明）	【冊子体】 ●長門峡探勝会発行 ●高島北海道（大正9年10月東京に於いて） ▼大正9年10月13日防長新聞記事「高島北海道誌（同）」
4	文 土山家609 図 273/F 1	日本勝景長門峡案内図	大正10年6月	●長門峡探勝会発行 ●発売所：萩東田町白銀日進堂書店 ●印刷者：大坂市東区川西町園田藤三郎 ●1/33000案内図（「全県地図」「里程表」付） ▼峡谷内の小地名の記載あり ●（地図裏面）「探勝道しるべ」、 「長門峡ノ五大特色井二丁字川」【No.3】
5	図 Y273/G 3	日本勝景長門峡えがき （原色版8枚1組）	大正10年6月	●長門峡探勝会発行の着色絵葉書 ①千瀑河口②龍宮淵魚切③柵崎房の出合④金柳溪弁慶魚切⑤切窓 ⑥奥取船の激流⑦運送下船⑧長門峡案内図 ▼①②③⑤高島北海の絵画付 ▼⑧「高島北海と山根武亮の顔写真/里程表」付 ●（別紙説明書）「長門峡の概要」
6	文 逆多放彩53	篠生村報（篠生村役場） 第6号 〈長門峡及其伝説〉	大正10年8月	探勝道路工事……大正10年1月31日入札、5月末開通見込 （4月13日）高島北海道 長門峡道路開通告知 「長門峡開削に就て」 篠生村長・長門峡探勝会理事 口羽藏 「長門峡に就て」 篠生村長に望む 阿武郡長・長門峡探勝会長 岡村勇二 「長門峡探勝」長門峡探勝会名誉顧問 高島北海 ▼大正9年8月15日防長新聞掲載記事に加筆 ▼長門峡の命名経緯が記されている 「長門峡ノ五大特色井二丁字川」高島北海道誌【No.3】

	<p>篠生村報（篠生村役場） 第6号 〈長門峡及其伝説〉</p>	<p>大正10年8月</p>	<p>「長門峡歌」高島九峰 長門開港史 山根男爵略伝／高島画伯略伝 長門峡伝説【上】三浦介元久にまつる伝説 ●御堂原●多々良製錬所●龍宮の音楽●鍾淵●怪家●多々良の龍跡 ●三浦介元久龍宮入行事附神事之事●渡川城址 長門峡伝説【下】明倫小学校訓導藤本滝江調査（▼一部は大正9年10月防長新聞に掲載） ●画聖雪舟阿闍梨の址●龍宮淵の伝説●暗淵の川脱走●湯の瀬温泉の開基 ●波止場の址●大藤の天孫●矢櫃の古戦場●雷の岩（岩内岩）の伝説 ●長春淵の伝説●杵木谷より大仏殿の用材を出す●川上村農民の墓 ●平家に関する伝説のさぐさ 長門峡採勝会規則（▼大正9年8月16日防長新聞に掲載） 高島北海筆「長門映画福所蔵者」 篠生村内長門峡採勝会員（大正10年7月未現在） 長門峡里程表 （8月1日）口羽村長による駅設置陳情（三田尻保線区） （9月20日）山根男爵・高島画伯 入峡／岡村部長による駅設置陳情（門司鉄道局） （10月1日）小平保蔵門司鉄道局長探勝 （10月2日）元田肇鉄道大臣による長門峡設置予定地実地検分（乗車した山口線列車が御堂原を終り、小平門司鉄道局長・中川望知事・岡村部長が随行） （10月29日）田中義一、国司精造・岡村勇二の長門峡探勝 （10月30日）長門峡仮駅開業 （11月11日）俳人花乃本穂秋入峡（長門峡開発関連の事情） （11月12日）中川望知事入峡 （11月13日）小平門司鉄道局長入峡 （11月14日）賀田金三郎による活動写真撮影 （2月17日）内務省史蹟名勝天然記念物保存会考査員国府庫東入峡 （6月19日）山根武亮・作間久吉入峡 （5月29日）長門峡桜樹植栽記念碑建立 （8月15日）東京地学協会學術考察団員入峡 （8月29日）財部島根県知事・野坂徳足都長・望月津和野町長入峡</p>
<p>6 文 波多放彩53</p>	<p>篠生村報（篠生村役場） 第7号 篠生村報（篠生村役場） 第8号 篠生村報（篠生村役場） 第10号 篠生村報（篠生村役場） 第12号 篠生村報（篠生村役場） 第17号 篠生村報（篠生村役場） 第25号 篠生村報（篠生村役場） 第27号</p>	<p>大正10年10月 大正10年11月 大正10年12月 大正11年3月 大正11年7月 大正12年7月 大正12年9月</p>	

文	一般郷土史料B259	長門峡探勝記	大正10年9月	【冊子体】 ●著者：松流熊野九郎 ●口絵写真：切窓（北海の絵付）写真【No.5⑤】 ▼探勝道整備後の山根将重と高島北海による入峡に同行した熊野九郎による紀行文（国司播磨・立永勝三郎・前田大吾等、のちの長門峡共楽会的主要メンバーが随行）
図	Y290/F 1			
文	田中義一文書1461	長門三大奇勝之一「長門峡写真真帖」	大正10年12月	●発行：長門峡探勝会 ●印刷所：株式会社審美書院（東京都京橋区新青町） ①丁字川②千瀬河口③榎が淵1④榎が淵2⑤生雲溪（仙浦の滝）⑥生雲溪（飯淵）⑦生雲溪（飯渡の滝）⑧北海洞道（内部分4）⑨龍宮淵第一断崖⑩龍宮淵第二断崖⑪龍宮淵第三断崖⑫龍宮淵⑬雪舟橋の茶屋⑭湯の瀧⑮碧桂⑯折角崎⑰蟹瀧の滝の犬塚⑱金郷沢⑳金郷沢（金松岩）㉑金郷沢（金郷門）㉒金郷沢（猿渡瀑布）㉓切窓突峰⑳重明岩㉑運葉（第二大瀑） ▼続編として、「青海島」美術部秋吉瀨六の写真集発行が計画されていた
文	田村哲夫1204			
文	木梨家693-27	小野田セメント製造株式会社工場見学記念写真集	大正11年4月	●作成：合資会社品川商店（大坂） ▼4月12日長門峡探勝（写真「千瀬河口？／榎が淵？／広滝／佳景淵と高島洞道」）
文	周防大島町佐川家	長門峡視察記念写真	大正11年10月か	●興会職員佐川健治ほか5名の御堂旅行 ●撮影場所：長門峡入口（御堂原） ▼背後の叢の山に山根武流揮毫の「長門峡」の文字が刻まれた板石が写る）
文	周防大島町佐川家1497	伝説を主としたる長門峡案内記	大正11年11月	【冊子】 ●著者：口羽慎蔵・河村勲吉 ●発行所：河村勲吉（篠生村町役） ●発行所：長門峡保勝会支部（篠生村事務所）（長門峡駅前河村樓観館内） ●（附図）長門峡案内地図
文	一般郷土史料269			
図	Y273/F 2			
図	Y273/F 8	伝説を主としたる長門峡案内記 附秋芳洞青海島（訂正第2版）	昭和3年9月	【冊子】 ●著者：口羽慎蔵・河村勲吉 ●発行所：河村勲吉（阿武郡篠生村大生雲東分） ●発行所：樓観館（阿武郡篠生村大生雲東分） ●（口絵写真）「千瀬河口」金郷出合
文	渡多放彩153	萩町外七箇村長門峡管理組合規約	大正11年12月	【監写刷】（▼「大正11年12月23日篠生村会で可決の文書きあり」） ▼関係町村（萩町・椿東村・樺村・山田村・川上村・篠生村・生雲村・福川村）
図	Y273E8	史蹟名勝天然記念物 第6巻第2号（月刊通号第76号）	大正12年2月	●史蹟名勝天然記念物保存協会機関誌 ●編輯兼発行者国府連徳（同協会幹事） ●東京帝國大学農科大学教授理学博士脇水毅五郎前漢録1名勝長門峡の成因に就て（大正11年10月19日；於萩高等女学校）▼10月18日長門峡視察後
文	一般郷土史料B264			【冊子】 ●東京地学協会主催講演会に於ける防長新聞社主催原田豊次郎講演録 ●山口大同印刷舎発行
文	田村哲夫1201	長門峡に就いて	大正12年	▼大正12年8月14日：於山口師範学校講堂 ▼8月15日の現地探勝前に「長門峡探勝の沿革」「長門峡の特色」について概説 ▼防長新聞紙上で連載（8月16日～25日）
文	御園生翁甫439			
文	文書館図書			
図	Y273/F 3-F6			

長門峡が顕彰されたこと（続三）

16	山口市山根家52	鉄道旅方案内	<p>【図書】●鉄道省編纂●株式会社博文館発行 ●大正13年10月初版 ●大正13年11月20日発行第10版 ▼挿入図除：吉田初三郎 ▼表紙55／裏表紙51【物見遊山、旅装】、「長門峡景勝図」、「山陽線沿線鳥瞰図」</p>
17	<p>文 一般郷土史料 B 265 文 一般郷土史料 B 266</p>	<p>名勝長門峡案内 附在々運の鍾乳洞</p>	<p>【冊子】●編纂兼発行：藤井薫（吉敷郡山口町道場門前第71番地）●発行所：長門峡案内第二給養舎発行所（山口町道場門前藤井写真館内）●印刷所（印刷人）：大向印刷舎（平佐園介）（吉敷郡山口町道場門前第1100の10番地） ●題字：山根武亮男爵・高島北海画伯●序文：作間鶴東先生●校閲：高島北海先生 ●（附図）長門峡全図</p>
18	文 文書館図書	長門峡游记	<p>【冊子】●著者：黒頭巾（福山健堂）▼萩町旅館大坂屋蔵執筆 ▼国立国会図書館電子ジャーナルで閲覧可能▼美祿線萩駅延（伸）記念刊行物</p>
19	図 Y237F5	長門峡鳥瞰図	<p>【折本】●著作権所有兼発行者：吉田初三郎（京都市外山科みさぎ）●印刷所：八一サレ七一社（吉田初三郎先生経営）●印刷者：小西権郎（大阪市南区喇慶町）（吉田初三郎先生経営 八一サレ七一社理事）●発行所：山口県萩町長門峡管理組合 ●発売者：藤川東輔（萩町東田町）、白石信夫（萩町西田町） ●鳥瞰図「長門峡全図」●題字「造化之妙」（鉄道省運輸局長種田虎雄） （裏面）●名勝長門峡案内●「絵に添えて一筆」吉田初三郎（▼張忠一に学ぶ現地案内） ▼国立国会図書館電子ジャーナルで閲覧可能▼美祿線萩駅延（伸）記念刊行物</p>
20	文 吉田禮堂838	<p>萩案内 附長門峡外二大奇勝 （再版）</p>	<p>【冊子】●初版発行大正14年3月 ●編輯兼発行人：栗屋芳亮（阿武郡萩町江向）●発行所：日本太郎社（同）●印刷所：信清舎印刷所（萩町西田町） ●編集協力（安藤紀一、浜野透哉、沼田泰輔、藤本龍江ほか） ●賛助（滝岡吉良、小通弥七、山田喜八、向田誠通、松田豊衛、渡邊好延、平瀬太平、岡之治郎、菊屋孫輔、賀田以武、岩田傳蔵、高村茂太郎、齋藤彦一、故小倉信林、林安次郎、国重政亮、大岡興一郎、藤田緋、前原昌一、北野右一、吉田剛一、末岡介、大建友太郎、末武清、平野権） ●表紙：吉田初三郎 ●地図（長門峡—青海島—美祿郡鍾乳洞 回遊交通網を示す） ▼美祿線萩駅延（伸）記念刊行物▼三大偉観と「長門峡・鍾乳洞・青海島」を併記</p>
21	<p>文 一般郷土史料 B133 明城文庫 Z79</p>	史蹟詳説萩案内 附長門峡外二大奇勝	<p>【冊子】●初版発行大正14年3月 ●編輯兼発行人：栗屋芳亮（阿武郡萩町江向）●発行所：日本太郎社（同） ●印刷人：泉菊次郎（下関市西南部町） ●印刷所：泉菊工場（下関市東南部町） ●発売所：藤川書店（萩町西田町） ●表紙：吉田初三郎 ●地図（長門峡—青海島—美祿郡鍾乳洞 回遊交通網を示す） ▼「長門峡・鍾乳洞・青海島」に加えて「須佐尊」を併記</p>
図 Y274/G 0			

22	文	上関町佐倉家48	被名所図絵	大正14年4月	【折本】鉄道開通記念出版（▼美弥線鉄道伸）●著作業所有業発行者：吉田初三郎（京都市外山町みさき）●印刷所：ハーフ・セブン社（吉田初三郎先生経営）●印刷者：小西権郎（大阪市南区順慶町3丁目15吉田初三郎先生経営ハーフセブン社理事）●発行所：萩町役場●発売者：萩町東田町藤川東輔、萩町西田町白石信夫
					●鳥瞰図「我を中心とする附近名所図会」●題字「光潤合畫田中義一」●鳥瞰図に示された長門峡開通景勝地跡（長門峡駅・丁字川・生雲梁・金柳梁・佐々連鍾乳洞・漣梁・高瀬）／「萩節」吉田初三郎作
					裏面●名勝長門峡案内●「絵に添えて一章」吉田初三郎
23	文	一般郷土史料B270	長門峡文鍾乳洞	大正14年4月	【U-グラフ】●門司鉄道局発行●「長門峡及萩吉鍾乳洞附近略図」 ▼美弥線鉄道伸を記念に作成
24	文	行政資料20内務-10 図 Y273F5	史蹟名勝天然記念物調査報告 第3巻（名勝長門峡）	大正14年4月	【冊子】●発行：山口県 ●印刷：県庁内山口県印刷所●長門峡概略図●写真 ●指定年月日・指定地域●探勝の道筋●開発の経路●概要（東長門峡・西長門峡・生雲梁・金柳梁・漣梁・佐々連洞と阿武川下り） ▼執筆者は岩根又重と思われる ▼【No.28】【No.39】【No.43】の記述内容がほぼ同じ
25	文	一般郷土史料B267 一般郷土史料B268 御園生翁甫440 田村哲夫1205	長門峡と耶馬溪	大正15年1月	【冊子】●著作者：横山達三（健堂、東京市本郷区駒込神明町341番地）●印刷者、印刷所：合興会社鉛木印刷所（鉛木政雄）大津郡深川村大字東深川第1317番地 表紙（耶馬溪青洞門）／裏表紙（耶馬溪古羅渡）ともに鉛画／口絵写真：「広滑」漣梁第一・第二切瀬「生雲梁暗洞」舟入「猿梁大瀑布」 ●「はじりき」原田紀堂（大正14年4月） ●「防長新聞」に100回にわたって連載された横山達三の「エッセイ」をまとめたもの（原田紀堂宛の短書のかたちで、大正14年1月9日から5月26日にかけて不定期連載） ●「防長新聞連載の切り抜き、明木村立図書館用紙に貼り付けて冊子体に編纂、明木図書館蔵書印が押印されている。表紙に貼り付けられた題察「長門峡と耶馬溪」には「健堂」の押印がある。
26	文	港口明城275	長門峡と耶馬溪（切り抜き）	（大正14年）	●「防長新聞連載の切り抜き、明木村立図書館用紙に貼り付けて冊子体に編纂、明木図書館蔵書印が押印されている。表紙に貼り付けられた題察「長門峡と耶馬溪」には「健堂」の押印がある。
27	文	御園生翁甫441	長門峡案内図	（発行年不明）	長門峡駅制原屋旅館発行
28	文	一般郷土史料 B 278 行政資料20学務-4 行政資料20学務-4 図 図書館Y273/F 7	石英斑岩の峡谷美 名勝長門峡	昭和2年7月	【冊子】●発行：山口県発行 ●印刷：県庁内山口県印刷所山口県発行／山口県庁内山口県印刷所 ●名勝長門峡調査者の参考として編集 ●山口県史蹟名勝天然記念物調査委員岩根又重調査執筆（▼【No.24】の記述にほぼ同じ） ●長門峡概略図（東長門峡・西長門峡・生雲梁・金柳梁・漣梁の区分）

長門峡が顕彰されたころ（浅川）

長門峡が顕彰されたころ（後川）

29	文	行政資料20国17	名所案内	昭和3年3月	【冊子】●発行）下関運輸事務所発行 ▲山口線沿線の名所のひとつとして紹介 ●概要 ●探勝閣路と設備 ●千瀑洞・舟入・龍宮洞・湯の瀬・生雲溪・暗がり淵・金柳溪・金松岩 総壁・猿溪の瀑布・阿武山下り・佐々運洞・雪舟閑居地】
30	文	一般郷土史料B275	長門峡の風景価値	昭和3年	【長門峡道路改修祝賀大園遊会】後援資料 主催：長門峡保勝会（前共榮会） 後援：防長新聞社・大隈毎日新聞社・関門日々新聞社 ▲昭和3年1月9-11日防長新聞連載記事に同じ
	文	一般郷土史料B276			
31	文	一般郷土史料B289	長門峡共榮会主催防長新聞社後援 落成祝賀大園遊会	昭和3年？	▲昭和3年5月開催予定とされていたが開催されなかったか不明（ただし、昭和3年5月に、小山谷三 経堂の日本名所図会会社「萩谷美 長門峡鳥瞰図」（中山富仙画、著作権者は篠生村の美咲舎）が制 作されていることから、何らかの祝賀式典の発行が計画されていたのであろう）。
	文	一般郷土史料 B 245	鍾乳洞案内	昭和4年2月	【U-レット】●門司鉄道局作成 ●山陽九州鉄道沿線の鍾乳洞紹介 ●秋芳洞薬清穴大正洞中尾洞佐々運洞 ●交通案内地図
32	図	Y454/F 9	長門峡と秋芳洞	昭和4年4月	【U-レット】●門司鉄道局作成 ●長門峡及秋吉鍾乳洞附近略図 ●長門峡／秋吉の秋芳洞・薬清穴・大正洞を紹介
	文	一般郷土史料 B 274			
34	図	Y273-7/G 0	長門峡第1号	昭和5年6月	●発行業編輯人：藤本伊三郎（阿武郡川上村大74171番地） ●印刷人：野村盛一（萩町大 字瓦町第73番地） ●印刷所：萩警海館（同） ●発行所：長門峡精舎（阿武郡川上村字江毛 九郎第3741番地の66長門峡発昌寺内）
35	図	Y273-7/G 0	長門峡第2号	昭和5年7月	●長門峡詳細図（長門峡の特色）旅館・茶店内、交通案内（ほか）
36	図	Y273-7/G 0	長門峡第3号	昭和5年8月	▲田中養一を閉塞とする寺院（榮昌寺）建立を扱った長門峡精舎の公報
37	文	滝口明城169	長門峡第14号	昭和6年9月	【折本】●発行：萩町役場 ●印刷人：澤田榮太郎（名古屋市東区神楽町3丁目3番地） ●印刷 所澤田文精社（名古屋市中区大津町2丁目）
38	文	一般郷土史料B130	萩案内	昭和5年8月	▲澤田文精社は吉田初三郎の「ワグワグ」（大正名所図絵社名古屋支部）から独立した画厚とさ れる。描かれているのは新果商果の筆になる鳥瞰図か？
	文	山口市小郡米光家79			
39	文	波多放彩138	名勝長門峡	昭和6年4月	【冊子】●山口県発行 ●印刷所：山口豊海館 ●印刷人：小沢兵造（山口市後河原15） ●名勝長門峡調査者の参考（▼【No.24】の記述にほぼ同）
	文	一般郷土史料B271	遊覧案内 長門峡と秋芳洞	昭和7年9月	●長門峡郵路図（▼東長門峡・西長門峡・生雲溪・金柳溪・蓮溪の区分） 【冊子】●小郡駅長発行 ●コース略図（長門峡－青島島－秋吉台・秋芳洞） ●長門峡略図
41	文	一般郷土史料B118	萩谷美の煙致長門峡	昭和7年か	【U-レット】●萩市役所内長門峡管理組合後援作成 ▲年代は明記されていないが萩市制施行後の昭和7年7月以降
	文	一般郷土史料B277			

42	文 一般郷土史料 B273	天下の奇勝 長門映案内	昭和8年2月以降	【U-17】●田中洗心館（長門映駅前丁字川畔）作成▼花の本穂利により命名 ▼表紙に防長観光協会（昭和8年2月設立）の記載あり
43	文 一般郷土史料 B290	名勝長門映の概況	昭和13年6月	【冊子】●山口県発行●山口県内山口県印刷所●名勝長門映探勝者の参考●山口県史蹟名勝天然記念物調査委員岩根文重調査執筆●長門映成因図●長門映郵便図（上長門映・中長門映・下長門映・生雲溪・金御深・漣溪の区分） ▼【No.24】の記述にほぼ同じ
	文 行政資料30字務-17			
	文 瀧口明城254			
44	文 山口市高津家46	名勝長門映の概況（写）	（昭和13年）	▼【No.43】を筆写したもの
	文 一般郷土史料 B272	名勝長門映案内	年代不明	【U-17】●山口県発行 ●名勝長門映路図 ▼発行は昭和14年4月以降と思われる（昭和14年4月の長門映管理組合解散と県管理移管についての記述がある）
46	文 一般郷土史料 B291	名勝長門映案内	昭和15年7月	【U-17】●山口県発行●編輯兼発行者：横尾年（阿武郡篠生村第112番地）●印刷人：宮成雄（山口市今通第7番地）●印刷所：防長防丸製紙合資会社（同前） ●表紙3/5（「變せよ郷土護るよ国土 漲る力 大地を踏んで 仰ぐ大空 光を浴びて」の標語） ●裏表紙「名勝長門映路図」
	文 田村哲夫1203			
47	文 藤井家（山口市1） 253	探勝記念 絵巻長門映案内	昭和18年7月	【折本】●編輯兼発行人：猪野里親（萩市吉田町38番地）●印刷所印刷人：河野三郎（島根県美濃郡益田町648番地）●配給元：日本統制地図株式会社大阪支店（大阪市西区西長堀北通の3丁目19） ▼【No.45】と記述と写真はほぼ同じ、【No.45】より紙質が良い、表紙の絵が異なる

所蔵先：「文」は文書館、「図」は県立山口図書館を示す。備考欄の▼は筆者による注記。

No.6「篠生村報」については、第6号のみ、県立山口図書館に所蔵あり（V273/F.1）。